地理学の視点で巡る「極上の会津」
―2019（令和元）年度「地理学研究」の覚え書き―

香川貴志*1

Geographical Excursion “Superior Aizu”
－Memorandum of Field Trip of the Aizu Area in August 2019－

KAGAWA Takashi

抄　録：本稿は，2019 年 8 月 23 日から 25 日までの 2 泊 3 日で実施した学部開講科目「地理学研究」，および大学院開講科目「地理学特論Ⅱ」の備忘録である。今年度は，福島県内の重要伝統的建造物群保存地区 3 か所の全てを巡ることに加えて，会津若松の中心市街地でワンデートリップの設計と実践を行った。本稿には事前学習の内容も含まれているが，事前学習における文献研究については，紙幅の関係から本誌に所収されている別稿（香川，2020）に譲る。現地行動で学生たちが得た経験は，重要伝統的建造物群保存地区を多く擁する京都との比較を通じて，2020 年の小学校から順次実施される学習指導要領の「主体的・対話的で深い学び」の実践に向けて大きな糧となるはずである。

キーワード：フィールドワーク，重要伝統的建造物群保存地区，南会津町前沢，下郷町大内宿，会津若松，喜多方市小田付

Ⅰ．目的地の選定と本授業科目の概要

奇数年開講の当科目「地理学研究」と偶数年開講の「地理学特講」は，事前学習と現地行動から構成される科目である。それゆえ現地行動の対象地域をどこにするのかで担当者である筆者は，前年度の「地理学特講」を終えた直後から考え始めた。例年なら大いに頭を悩ませるところであるが，今年度の当科目については例年とは異なり対象地域がすぐに決まった。

なぜなら，前年に訪問した愛媛県西予市卯之町と同県内子町の重要伝統的建造物群保存地区（以下では書名等を除き「重伝建地区」と記す）での見聞が学生たちに良い経験を与えたことが良く分かったからである。筆者は文化庁（2015）がまとめた『歴史と文化の町並み事典―要伝統的建造物群保存地区 109―』 を紐解いて，2 泊 3 日の行程で巡ることができる，複数の重伝建地区を含む領域の模索に着手した。その話を同僚で上司でもある武田一郎教授（2019 年 3 月末で定年退職して現在は本学名誉教授）にしたところ，「福島県の大内宿は面白いよ」との教唆を得た。上記の書籍を精査すると近くの南会津町前沢にも重伝建地区があるうえ，文化庁の Web サイトで上記書籍の刊行以降の重伝建地区の指定状況を調べていると，喜多方市小田付が最新の指

*1 京都教育大学教育学部 ／ 京都教育大学附属桃山小学校（併任）

定地区であることが判明した。「行程を工夫すれば無理なく 3 か所を巡ることができる」と感じた筆者が予備調査で会津地方を訪ねるまで多くの時間は要さなかった。

福島県は 2011 年に発生した東北地方太平洋沖地震で福島第一原発がメルトダウンしたことによる風評被害を受けて観光客の減少に悩んだ時期もあり（高木・仲井, 2013），会津若松には福島第一原発の所在地で立入規制を受けた福島県双葉郡大熊町の町役場が一時移転をしていて現代日本の縮図のような事例もみられる。さらに 2005 年の「福島ディスティネーションキャンペーン」を継承して 2006 年から始められた「極上の会津」という観光促進事業（全国地方銀行協会調査部, 2006; 財界ふくしま編集部, 2006a; 同, 2006b）が現在まで息長く続けられており，地域振興への取組を現地で学べるという利点もある。歴史的遺産と現代的課題が同時に経験できるという点で，会津地方は地理学的観点に立つと「極上」の地であった。

日程は 8 月上旬まで前期試験があったことや宿舎確保の面で不都合があり, 8 月 23～25 日の 2 泊 3 日の行程とした。例年通りの現地集合は 23 日の 10:00 に JR 会津若松駅前，25 日の 13:30 に JR 喜多方駅前で現地解散とした。3 日間のコマ数（時間数）は，23 日が 3 コマ（6 時間），24 日が 5 コマ（10 時間），25 日が 3 コマ（6 時間）である。当科目は 2 単位科目なので，単位認定に必要な残りの 4 コマ（8 時間）は第 1 回～第 3 回の事前学習会で埋めた。

当初の受講登録者数は，学部の「地理学研究」が 21 名，大学院の「地理学特論Ⅱ」が 1 名だったが，学部受講登録者からその後に 2 名のキャンセルが発生し，最終的には学部 19 名（全て社会領域専攻の 3 回生で男子 14 名と女子 5 名）と大学院 1 名（M1 男子）となった。これらの受講生に加えて, 単位取得を目的とせずにオブザーバー参加（当授業科目の単位取得済みのため）した大学院 M2 の男子学生が 1 名，本学地理学研究室の卒業・修了生であり，国際地理オリンピックの国際大会で日本代表チームのリーダーを 3 度務めた経験のある，神奈川県立川崎高等学校の井上明日香教諭がフィールドワーク（以下では FW と記す）の参与観察のため帯同してくれた。結果，引率者である筆者を含めて総勢 23 名の陣容となった。

Ⅱ．事前学習会

前章に記したように，今年度の本授業科目は，事前学習会を 3 回（4 コマ 8 時間）設定した。近年の例に漏れず，今年度の事前学習会は全て土曜日に設定した。実施日は，第 1 回が 4 月 20 日，第 2 回が 6 月 15 日，第 3 回が 7 月 20 日で，各回とも昼食を済ませてから正午開始とした。配当時間は，第 1 回が 1 コマ（2 時間），第 2 回は 2 コマ（4 時間），第 3 回が 1 コマ（2 時間）である。これらを次章で述べる現地実習 11 コマ（22 時間）と合算すれば 15 コマ 30 時間となる。事前学習会の各回における内容については，本章の第 1 節～第 3 節で述べる。

2.1　第 1 回事前学習会（4 月 20 日，12:00～13:30）

この日は例年通り, 本授業科目のアウトラインをシラバスの内容よりも詳しく説明した。また，3 月下旬に CiNii を使って情報収集した論文，対象地域に詳しい福島大学の初澤敏生教授から教示を得た論文を合わせて，その書誌情報をリストアップのうえ配布した。今回の訪問地である南会津町前沢集落，下郷町大内宿，中心市街地を主とした会津若松市，喜多方市小田付に関する文

献のリストアップ総数は，シリーズ的なものを 1 つにまとめてカウントすると 32 件あった。

事前学習の課題として，これらの文献要旨を 1 人あたり 2~5 本まとめさせるため，文献収集の手間，文献の頁数による精読負担などに配慮してグループ化し，受講生の関心領域に目配せしつつ割り振った。この一連の流れと文献要旨については本誌に掲載された香川（2020）に詳しい。ただし，当初抽出された 32 件の文献のうち，現物の取寄せ後に写真集（グラビア）に近い記事と判断されたものは文献要旨をまとめる対象から除外した。

文献収集と精読に相応の時間を要するため，第 2 回事前学習会は約 2 か月後の 6 月 16 日に設定した。この間に受講生は自身で時間配分を考えて担当文献を収集し，精読を経て文献要旨を作成することになる。文献要旨をまとめる際に使用するテンプレートは，筆者が作成したものを第 1 回事前学習会があった夜に受講生へメール添付で送信した。

2.2　第 2 回事前学習会（6 月 16 日，12:00～15:10）

第 2 回事前学習会の数日前，テンプレート上に入力した文献要旨の提出を締め切った。1 名のキャンセルが発生したため，当該学生が担当予定であった文献の一部は筆者が要旨のまとめを代行した。集まった文献要旨は一切の内容調整を施さずに印刷し第 2 回事前学習会で配布した。

この課題を使って受講生に自身が担当した文献から 1 編を選ばせ，その内容をゼミ発表のような様式で 1 本当たり 5 分程度説明させ，当該文献の内容についての質疑に移った。例年通り文献の内容に関する質問は低調であったため，内容に関する補足を筆者が行った。この補足は多面的な知識と準備が要求されるため非常に辛く厳しい仕事である。

リストアップされた文献は，このようにしてほぼ全てが内容紹介され，現地に赴く前に知識や情報を得ることができた。現地行動を実のあるものとするために文献研究は事前学習では極めて重要な取組であるといえよう。

2.3　第 3 回事前学習会（7 月 20 日，12:00～13:30）

既に文献要旨の学習を第 2 回事前学習会で終えているため，第 3 回事前学習会では現地行動の予定を詳しく説明し質問を受け付ける形式とした。対象地域が遠方であることもあり，往復の交通費を安くするための工夫などについての質問が多くあった。

また，現地行動の初日に貸切バスを利用することから，レジャーとしての遠足ではないので車中では嬌声を上げたりスマートフォンと戯れたりしないよう注意した。地理学を専門とする受講生が大半であった頃には，こうした注意も不要であったが，関心領域が多彩な受講生手段になって以降，地理学的なエクスカーションにおける車窓観察の大切について説明を要するようになった。

Ⅲ．現地実習

本章では，2 泊 3 日の行程で実施した現地実習について，現地集合から現地解散までのアウトラインを記載する。なお，各節のタイトルに添えた現地実習期間中の最高気温は，日本気象協会の Web サイト「tenk.jp」より，各日の現地実習の中心になった場所から最も近い地点のデータ

を検索のうえ明示した。

3.1 現地実習第１日目（8 月 23 日（金），晴，会津田島の最高気温：27.0℃（12:30））

この日は南会津町前沢集落と下郷町大内宿の２つの重伝建地区を訪問するコースを組んだ。いずれも公共交通の便が良くない場所であるため，会津乗合自動車（会津バス）に依頼して貸切バスを利用することにした。同社の営業部から事前に会津若松駅のバス乗り場の写真地図を得ていたため，これを前章第 3 節の第 3 回事前学習会で複写配布し，現地集合場所の確認を徹底した。そのためか集合時間や集合場所を間違えた者は居なかった。集合時間は 10:00 であり，バス会社の担当者に2日目の会津若松市内1日乗車券代金を含む料金を支払ってから 10:05 に出発できた。

出発してから会津若松の市街地を抜けるまでは，車窓から市街地南部の都市化の説明，東日本大震災で帰還困難になっている大熊町役場が会津若松市内で一時的に庁舎を構えていることなどを説明した。また，市街地が途切れてからは会津盆地の農業に関する解説をした。また，10:40 頃に今回の現地実習の予定などを記した小冊子を配布した。これには現地での行動計画のほか，現地での課題，宿舎の部屋割り表，2 日目の会津若松市内におけるワンデートリップ設計の資料となるバス時刻表，そして今回まとめた論文要旨（香川（2020）の付録と同一で筆者が調整したもの）を綴じ込んだ。

南会津町前沢集落には，会津若松を出発してから 2 時間後の 12:05 に到着した。道中は集合場所までの長距離移動の疲れが出たのか居眠りをしている学生も散見されたものの，前沢集落に着く前に車中でパンなどの軽食を摂るよう指示していたので，多くの学生は相応の時間に車中で昼食を済ませた。出たゴミは全て持ち帰るよう指示した。

南会津町前沢は，曲屋と呼ばれる家畜小屋を組み込んだ家屋が特徴的な集落で，交通の利便性に優れないことから旧来の家屋形態が保持されてきた集落である。文化庁から重伝建地区に指定されたのは，2011（平成 23）年であり比較的新しい。今回の授業では福島県内の重伝建地区を全て訪問したため，相互比較の見地から各地区の諸元を表 1 にまとめた。

表 1　福島県の重要伝統的建造物群保存地区一覧（2019年8月23日現在）

指定地区名称	種別	指定年月日	面積（ha）	指定基準
南会津町前沢	山村	2011.06.21	13.3	3
下郷町大内宿	宿場町	1981.04.18	11.3	3
喜多方市小田付	在郷町，醸造町	2018.08.17	15.5	2

選定基準について

1：伝統的建造物群が全体として意匠的に優秀なもの

2：伝統的建造物群及び地割がよく旧態を保持しているもの

3：伝統的建造物群及びその周囲の環境が地域的特色を顕著に示しているもの

資料 文化庁Webサイト「重要伝統的建造物群保存地区一覧」

前沢は，保存地区の維持管理のため地域内に入る際に 500 円を要する。これは神社仏閣の入場料と同様に文化財保護のための協力金と考えれば良いだろう。全員で団体料金を支払って，再集合の時間を告げて集落内は自由散策とした。その後，バス駐車場で 12:45 に再集合し，点呼の後 12:50 に出発した。途中まで往路と同じ道を戻り，湯之上温泉駅付近から下郷町大内宿へ向かう道に入った。大内宿が現在の幹線交通路から随分離れていて比高もあることが道路形状から良く分かる。大内宿へ着いたのは 14:15 であった。

大内宿の諸元は，既出の表 1 に示した通りである。当地は 1981（昭和 56）年に指定されており，全国の重伝建地区の中でも最古のグループに入る。新聞紙上の国内旅行広告でも当地の様子が写真入りで頻繁に紹介されていて，秋田県仙北市の角館，長野県南木曽町の妻籠宿，岐阜県白川村荻町，京都市東山区三寧坂や同・祇園新橋などとともに著名なグループに入る。バスを降りてから地区内で実施する簡易 FW の説明を施し，車中で配布した地域調査用の大縮尺地図（住宅地図の一部を複写したもの）を使う作業に入った。

調査内容は当地が重伝建地区であることを踏まえていれば自由で，このように何らかの条件を付して地域調査に臨むのは国際地理オリンピックの FW テストの手法を踏まえたものである。調査は単独とグループの別を問わないことにした。FW の結果は地図にまとめて提出する課題とした。再集合時刻は 15:45 でバス駐車場と定めて告知し，筆者も学生たちと同様の FW に取り組んだ。筆者の FW は，提出される課題を評価する際の資料とするためのものである。

帰路は 15:50 に大内宿のバス駐車場を発ち，約 1 時間で会津若松市内の宿舎である「民宿多賀来」に到着した。宿舎到着後，ただちに部屋割り表を完成させ，夕食時間の連絡を済ませてから各部屋で荷解きとなった。夕食時には翌日の行動予定を伝え，学生たちは各部屋で課題に取り組んだり雑談に興じたりして過ごした。

3.2　現地実習第 2 日目（8 月 24 日（土），晴，会津若松の最高気温：29.5℃（12:00））

この日は幸い天候にも恵まれて絶好の行楽日和となった。早朝には涼しさも感じられ，日中の気温も 30 度を超えなかったので，学生たちが市街地を巡るのに支障は少なかったはずである。

当日は朝食を済ませた後，個人またはグループで会津若松市内の関心ある場所を巡り，ワンデートリップの観光コースを提案するという課題を課した。詳細は次章に譲るが，こうした形態で進めたため，宿舎からの出発は五月雨式のものとなった。

筆者は学生たちがこの日の FW に取り組んでいる時間を利用して，翌日に巡る喜多方市内の最終下見に赴いた。もちろん，緊急連絡用に筆者のスマートフォンの番号は周知しておいた。直前下見では，コインロッカーやトイレの場所，市内での移動交通手段，昼食場所，解散場所などを確認した。ただ，今回のような自由散策形式の FW を課しての時間を活用しない限り，直前下見は困難である。直前下見では，重伝建地区である小田付地区内の小原酒造で翌日の工場見学の約束を取り付けることができた。

なお，この日の夕食は 2 日目の夜ということもあり，恒例の反省会兼コンパとした。今回は 3 回生以上のメンバーだったので未成年者を特定する必要は無かった。宴席には，筆者が日中に小原酒造で購入した純米酒「蔵粋（くらしっく）アマデウス」を宿舎のご厚意のもと提供できた。

3.3 現地実習第 3 日目（8 月 25 日（日），曇り時々雨，喜多方の最高気温：27.0℃（14:40））

喜多方へ向かうため，朝食の後，全員が荷物を持って会津若松駅へ移動した。市内循環バスが中型車であるため，可能な限り 2 便に分かれて乗るよう指示した。また，大きな荷物については解散後の予定に応じて，①会津若松駅のコインロッカー，②喜多方駅のコインロッカーのいずれかで保管するよう伝えたが，ほぼ全員が会津若松駅で預けたようである。

会津若松駅を 9:53 の普通列車で発ち，予め学生たちに告げていた課題を車中で提出させた。全員が漏れなく課題を提出できたのは幸いであった。個々の課題の評価については次章に譲る。喜多方駅には 10:20 の定刻に到着した。そして，前日の直前下見で確認しておいた市内循環バスで小田付地区まで移動した。小田付は表 1 に示したように重伝建地区に指定されてから日が浅く，現地実習時では最新の指定地区であった。

ただ，反省点もある。喜多方駅前から乗り込んだ市内循環バスは中型バスであったため，一日乗車券の発券に時間を要したことに加え，一般乗客と錯綜して発車時刻が 10 分程度遅れてしまい，図らずも一般乗客に迷惑をかけることとなった。料金は一括して支払ったものの，発券が個票だったため時間ロスを生じた。事前に購入できれば，こうした不具合は生じ難いと思われる。これは運行システムの改善課題として指摘できよう。小田付地区に到着後は，小原酒造での見学予定時刻が迫っていたので，直ちに現場へ向かった。

小原酒造は醸造の過程で酒にクラッシック音楽を聴かせることで知られる伝統ある蔵元で，ここの著名な清酒は前節に記したとおり「蔵粋（くらしっく）」と命名され，暖簾にも「蔵粋」という文字があしらわれている。蔵の中でモーツァルトが流れる様子も見学し，工場や酒蔵をつぶさに観察できた。

蔵元見学を終えた後，小田付地区の概要を喜多方市教育委員会（2016）から得た情報に基づいて現地説明し，ここから喜多方駅で再集合する 13:30 までは個人またはグループでの行動とした。当初は市内循環バスで集団行動する予定だったが，我われ全員が一度に乗車するとバスが混乱をきたすことが往路で分かったので，個人またはグループでの行動に切り替えた。小田付地区で早速に喜多方ラーメンに舌鼓を打つ学生たちもいたため，図らずも適度な分散が得られたのは幸いであった。

自由行動の間は，学生たちの観察眼を鈍らせないための工夫（＝単なる観光に終始させないための工夫）が必要である。今回は喜多方での課題として，解散後の当日中にスマートフォンから提出させる簡単な課題を与えた。その内容については次章に譲る。

解散のための集合には全員が時間通りに集まった。新潟方面に移動する者は観察した限りいなかったようである。筆者は新潟での所用があったものの，列車の発車まで時間的な余裕があったため，学生たちと一緒に会津若松駅まで戻った。学生たちは当日中に京都へ帰洛する者，夜行バスで帰洛する者など様々であったが，幸い大きな事故も無く現地実習を終えることができた。

Ⅳ．提出課題の特徴から導出できる地理的視点を育てる工夫

本章では，今回の授業で受講生に提出させた 5 つの課題に焦点を当て，その特徴を簡潔にまとめるとともに，そこから地理的視点を育てるための工夫について考える。ここで触れる地理的視

点とは，考察や提案のためにどのような資料（統計や地図）が必要なのかを見極める眼力，適切な資料が見当たらない場合にいかなる地域調査をして何に注目すれば良いのかを判断できる能力を意味している。こうした地理的視点は，教師が持っておくべき素養であると同時に，教師はそれを児童生徒に分かりやすく伝授していかなければならない。

上記のような地理的視点を育むための課題として与えた 5 つの課題は次の通りであり，各々の課題①～⑤の特徴，評価観点や改善に向けた展望などは本章各節の番号に対応している。

① キーワードの選定と文献要旨の作成
② 地形図読図模擬問題の作成
③ 大内宿での地図作成
④ 会津若松でのワンデートリップの設計と実践
⑤ 喜多方を舞台にしたショートキャッチフレーズの提案

4.1 文献研究—キーワードの選定と文献要旨の作成—

本稿の第Ⅱ章で述べた事前学習会で得た文献要旨および各文献のキーワードを観察すると，別稿（香川, 2020）に記したように要旨は相応に仕上がっていたものの，キーワードに関しては改善の余地のあるものが散見された。詳しくは上記の別稿に譲る。

4.2 地形図読図模擬問題の作成

ここ数年の本授業では，高等学校時代に「地理」を学んでいない教員が近年の地理教育現場で増えていること，また教員採用試験で地形図を用いた読図問題が頻出することなどを受けて，地形図の読図模擬問題を作成させている。昨年実施した愛媛県西予市卯之町および同県内子町の中心部を題材とした地形図読図課題については香川（2019a, 2019b）に詳しい。素材となる地形図は，今年も例年にならって高校入試・大学入試・教員採用試験で出題頻度が高い 1/25,000 地形図とした。図幅名は「若松」（図 1，図 2）で，昨年に続けて新旧地形図を比較しながらの作問に取り組ませた。この課題は，第 3 回事前学習会で配布し，現地行動の最終日に回収することとした。

地形図読図の模擬問題は，昨年と同様に「教員採用試験の模擬問題をセンター試験スタイルの 4 者 1 択の客観式問題として作成せよ」と指示した。この課題は作問だけでなく，誤答となる選択肢を含めて解説を添える必要がある。こうした指示を受けた受講生は，必然的に本学附属図書館に収蔵されている教員採用試験の過去問に触れることになるため，教員採用試験に向けた準備の必要性を感じさせるという狙いもある。ただ，授業担当者として見本を示す必要があるので，筆者は次のような例題を作成して地形図に添えて配布した。また，昨年の前例をまとめた香川（2019a, 2019b）にも目を通して参考にするよう伝えた。

【筆者が提示した例題】

問 新旧の 1/25,000 地形図（会津若松市中心市街地の南部）を使って，下の説明文のうち正しいものを①～④より 1 つ選びなさい。

① 若松城跡の周辺には新旧の地図とも多くの学校があり，城跡の中には福島県内では珍しい茶畑がある。

② 西若松（にしわかまつ）駅の南 500m 付近で分岐する鉄道線で南方へ真っすぐ進む路線

図１　会津若松市の中心市街地南部の1/25,000地形図（旧図）
（資料）1/25,000「若松」1976年２月28日発行

は単線化された。

③ 若松城跡の周辺で多くみられたクランク状や丁字型の街路の多くは十字路の交差点に改修されている。

④ 若松城跡の南 500m 付近の高等学校周辺では水田が市街地化する過程で多くの新し街路が設けられた。

解答・解説　正解は④です。

① 城下町では城郭の周囲に武家屋敷が建ち並ぶため，廃藩置県後に広い敷地を活用して多くの公共施設が立地する傾向がある。学校もその好例の一つである。新旧の図中の城跡にみられる∴の記号は図案が茶畑と同一であるが，大きさからして史跡だと判断するのが穏当である。「茶畑」の部分の記述が誤りなので，この選択肢は正解にできない。

② この選択肢で説明されている鉄道は，JR以外の民営鉄道を示す記号である。したがって，記述が誤っており正解にはならない。この鉄道は会津鉄道（旧・国鉄会津線）であるが現在は野岩鉄道・東武鉄道と路線が繋がっており，会津若松から１回の乗換だけで浅草ま

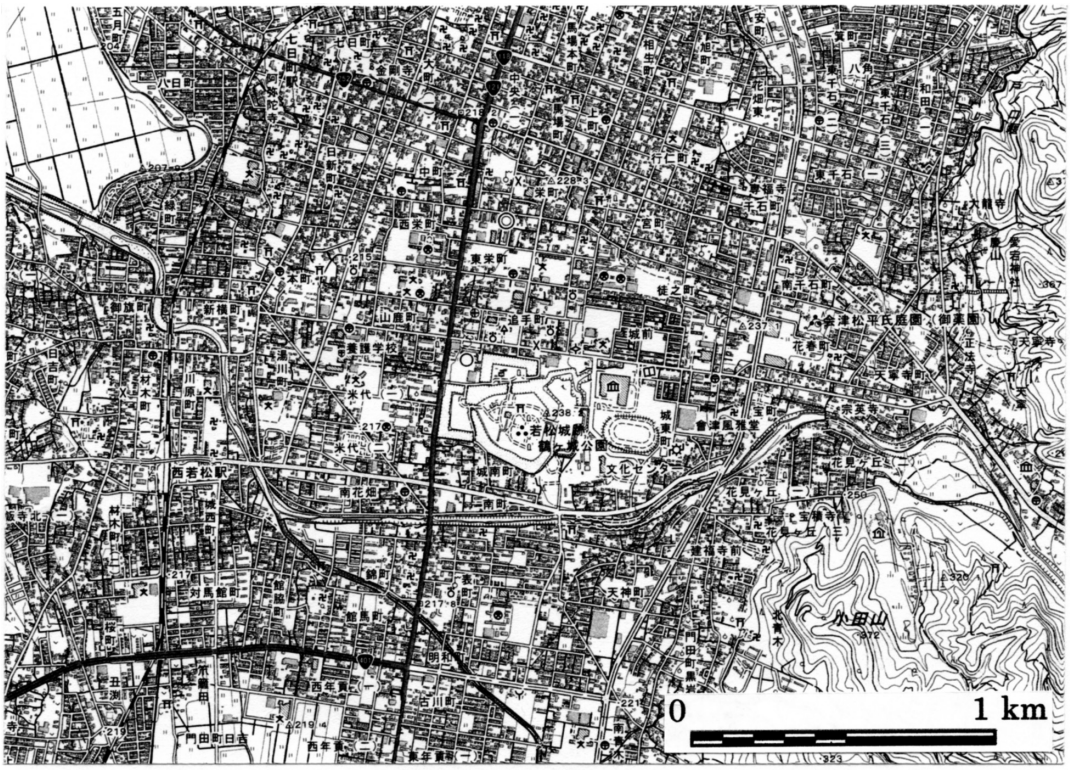

図２　会津若松市の中心市街地南部の1/25,000地形図（新図）
（資料）1/25,000「若松」2017年11月1日発行

で行くことができる。

③ 城下町で典型的にみられる遠見遮断（とおみしゃだん）といわれる都市計画技法で，ほぼ全国の城下町で共通して確認できる。この都市計画技法は，城下に攻め入っても遠方が見通せず城下の防衛に大きな役割を果たした。歴史学者には遠見遮断を否定する者も居るが，遠見遮断は地理学や都市工学で確立された正しい理論である。街路の改修は殆ど無いため記述が誤っており正解にはならない。

④ 旧図では水田が卓越していたこの地域にも，新図では建物が充填されている様子を読み取れる。一般的に農地の区画は住宅地などの市街地よりも大きいため，各建物へのアクセス性を向上させるべく市街地造成の際に街路が増設される。地方都市では密集市街地を避けた宅地化の際，同様の事象が普遍的に確認できる。正しい記述ゆえ，これが正解である。

上記の例題や教員採用試験の過去問を参考にして受講生が作成・提出した模擬問題を精査すると，昨年のケースよりも若干の改善が認められるものの，相変わらず「地図記号探し」が半数強の者の模擬問題で目立ち，中にはこれに終始した選択肢を並べた者もいた。また，提示した地図

の図郭外に実在する地名に触れた選択肢，新図において若松城跡の近くにある町村役場を「大熊町役場」と述べた選択肢など，例示した地図だけでは判断できない選択肢も散見された。

地形図読図に関する作問では，選択肢を作成する際に地図記号（点的要素）だけでなく，交通路（線的要素）や土地利用（面的要素）にも目配せすることが大切であり，このことは次年度以降の授業でも強調しておきたい。

4.3　大内宿での地図作成

当地では住宅地図の一部を複写した地図を A4 サイズの用紙に印刷した地図をベースマップとして，ここが重伝建地区であることを踏まえて FW に臨ませた。調査の際の必需品であるクリップボードを持参するよう第 3 回事前学習会で連絡済みであったため，全員がそれを忘れることなく携えており，バス降車後に簡単な説明をしてから即座に FW の実施に移ることができた。本学の場合，クリップボードは授業参観や教育実習での必需品でもあり，仮に特別の指示を出さなくても大半の受講生が自主的に持参すると考えられる。

調査結果は地図に着色して提出させたが，総じて凡例が多過ぎて地図の仕上がりは極めて初歩的な水準に留まっていた。本学では文学部や理学部の地理学研究室で実施されているような「地理学実習」や「地図学」に類する授業が無いため，地図作成のためのセンスが磨かれていない恐れがある。ただ，香川（2019a, 2019b）に記した地図作成の際の 4 つの要素である DSLT（方位 Direction，縮尺 Scale，凡例 Legend，図のタイトル Title）は大半の者が漏れなく記せていた。

凡例が多過ぎるのは，ほぼ全軒が何らかの客商売を営む大内宿を販売品目や業種で細かく分類し過ぎたのが原因であると推察できる。当地の商業活動は，筆者の FW をもとに大別すると，①小売業（土産物が中心），②飲食業（蕎麦などの軽食が中心），③宿泊業（民宿）の 3 種に分類できる。もちろん①～③のうちの 2 種または 3 種が混在する店舗もあるため，これら 3 種を集合論的に眺めれば単種類か複種類かに応じて，カラー図では必然的に 3～ 7 種の凡例ができてしまう。

このようなケースでは白黒図の方が明快な地図となることが多い。たとえば上記の①～③の業種を次のような凡例で表現した場合，パターン（模様）を重複させた表現によって複種類からなる商店の表現が可能となる。具体的に記そう。①を右上がり斜線，②を右下がりの斜線，③を水平線のパターンで表現した時，①と②の 2 種類を営む商店は斜格子パターンで表現され，それに③が加わった 3 種類の業種が混在する店舗は斜格子に水平線が重なったパターンで描かれる。このような地図表現上の工夫は，次年度以降の地図作成 FW の際に知図表現技法として是非とも教えておきたい事柄である。

また，今回の課題では，前沢と大内宿とを比較して感じたこともメモさせた。前者が素朴さの残る場所であるのに対して，後者が観光地化されていることをほぼ全員が指摘していたが，前者を大内宿のように観光地化させるべきであるという意見は皆無だった。同じ会津地方の重伝建地区であっても，個々の地域の特性を活用した取組を尊重できている点で，間を開けずに同日に両地区の訪問が叶ったことの効果は相応に得られたと判断できよう。

4.4　会津若松でのワンデートリップ設計と実践

この課題は，前章第 2 節で述べた個人またはグループによる会津若松市街地での行動記録を通

じた，ワンデートリップの提案である。行動記録には時程を添えさせ，地域観察を深化させるために見学施設・地点の長所と短所を併せて記入させた。その結果をまとめたものが表2である。

学部学生19名と大学院学生1名の計20名は表内1行目のa～tで示している。大学院学生はtである。当該学生は表内では個人行動のようにみえるが，単位取得を目的とせずオブザーバー参加したM2の大学院学生と行動を共にしている。また，表内で太枠で囲まれている学生は同一グループとして一緒に行動している。

表2を観察すると，白虎隊記念館・白虎隊十九士の墓・さざえ堂がある飯盛山，御薬園や茶室麟閣を含む鶴ヶ城（若松城）は全員が訪問しており，会津若松の市街地観光では外せない定番スポットであることがわかる。事前学習会の折に商業地としての再生事業を紹介した七日町通り，宿舎から至近の会津武家屋敷，宿舎から遠くない東山温泉の3地点は，過半数の学生たちが訪れている。これらは全て会津若松市観光商工部観光課で教示を得た「お勧めスポット」であり，飯盛山や鶴ヶ城だけではない観光行動で選ばれる場所であると考えられる。これらに対して，宿舎から至近のネパール博物館，会津若松駅，野口英世記念館は訪問した学生が少なかった。

各グループの訪問地点数を一瞥すると3～5か所の訪問となっており，公共交通機関を利用してのワンデートリップでは，せいぜい5か所が時間的に限界なのであろう。自家用車を活用すればもう少し巡回できるかもしれない。しかし，観光行政的には環境保護の観点から公共交通の利用を促す方が理想かつ賢明であると考えられる。

訪問地点に添えさせた各地点の長短所については，紙幅の都合で詳述する余裕が無い。全体を総括すると，長所については指摘内容が十人十色であったものの，短所に関しては全員が訪問した飯盛山や鶴ヶ城ともにバリアフリーやユニバーサルデザインへの配慮が不足しているとの指摘が圧倒的であった。歴史的遺産でのバリアフリーの実現は二律背反的になる。しかし，たとえば飯盛山の有料エスカレーターの傍らにエレベーターを増設し，さざえ堂や白虎隊記念館への入館料金とトータルで歴史遺産維持費などと称した入山料を課すのも一案だろう。市民の散歩でも登れるように，施設に入館せず階段を使う場合は無料開放するという柔軟な方策が期待される。

表2　会津若松におけるワンデートリップでの訪問地

	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	m	n	o	p	q	r	s	t	計
会津武家屋敷	○	○							○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		13
ネパール博物館			○	○	○	○															4
東山温泉			○	○	○	○			○	○	○	○	○	○	○	○					12
飯盛山 注1)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	20
会津若松駅	○	○																			2
七日町通り	○	○					○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	16
野口英世記念館																				○	1
鶴ヶ城（若松城） 注2)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	20

注1）白虎隊資料館，白虎隊十九士の墓，さざえ堂などを含む

注2）御薬園，茶室麟閣などを含む

資料：受講生が提出した課題より作成

4.5　喜多方を舞台にしたショートキャッチフレーズの提案

この課題は喜多方での現地行動を終えた直後に現地解散すること，前期の成績提出期限を過ぎることを教務課から特別に認めてもらったことを受けて，短時間で仕上げて提出できるような課題を与えた。この課題は第1日目に貸切バスの車中で配布したブックレットに記しておいた。解散時には「解散当日中にメールで課題提出」との再確認をした。課題の内容は「喜多方市街地での FW を通じて感じたことを 17 文字以内のショートキャッチフレーズにまとめる」というもので，17 文字というのは五七五の俳句や川柳でも対応できるよう配慮したものである。ただし，筆者にキャッチフレーズや俳句・川柳を評価できるキャリアや実力は無いため，この課題に関しては提出の有無だけで評価した。つまり出来具合の水準は評価対象ではない。

提出された課題は未提出の者1名を除いて1人あたり1編ずつで no.1～no.20 の作品が集まった。これらをまとめると表3のようになるが，うち1編は筆者が詠んだ俳句である。

表3　喜多方を舞台にしたショートキャッチフレーズの提案

					酒
1	喜びを 多く与える 喜多方市	俳句・川柳型	○	×	×
2	古き良き 今も継承 これからも	俳句・川柳型	×	×	×
3	飯豊山の融雪水で潤う街 喜多方	ｷｬｯﾁｺﾋﾟｰ型	○	×	×
4	またきたい 喜多方市	ｷｬｯﾁｺﾋﾟｰ型	○	×	×
5	温と冷！ 喜多方ラーメン 食べてみて	俳句・川柳型	○	○	×
6	酒うまし ラーメンうまし 喜多方市	俳句・川柳型	○	○	○
7	ラーメンと 酒が好きなら 喜多方へ	俳句・川柳型	○	○	○
8	蔵の中の街。秘蔵の喜多方	ｷｬｯﾁｺﾋﾟｰ型	○	×	×
9	モーツァルト 奏でる街で 飲んで食べ	俳句・川柳型	×	△	△
10	蔵っとするほど美味しいラーメンの街	ｷｬｯﾁｺﾋﾟｰ型	×	○	×
11	ラーメンと お酒とともに 散歩しよう	俳句・川柳型	×	○	○
12	喜多方の ラーメンおししい 人優しい	俳句・川柳型	○	○	×
13	日本酒とラーメンの組み合わせ どう？	ｷｬｯﾁｺﾋﾟｰ型	×	○	○
14	酒とラーメン 東北の京都!? 喜多方	ｷｬｯﾁｺﾋﾟｰ型	○	○	○
15	会津来て 愛する心 ここにあり	俳句・川柳型	△	×	×
16	ちぢれ麺と酒場栄える人情の街 喜多方	ｷｬｯﾁｺﾋﾟｰ型	○	○	○
17	醤油と酒の香る街 喜多方	ｷｬｯﾁｺﾋﾟｰ型	○	△	○
8	人々とラーメンの温かい街	ｷｬｯﾁｺﾋﾟｰ型	×	○	×
19	奥深き あじわい溢れる 蔵の街	俳句・川柳型	×	×	×
20	拉麺(めん)の湯気 名残の夏に 法師蝉	俳句・川柳型	×	○	×

《3～5列の記号の凡例》○：該当，△：一部該当，×：該当なし

資料：受講生の作業課題および筆者作品より作成

表 3 を眺めつつ作品の傾向を一瞥する。作品スタイルは俳句・川柳型が 11 編（うち 1 編は筆者の作品），キャッチコピー型が 9 編あり，両者が数的に拮抗している。

次に地名の有無を観察すると，表中では〇で示した「喜多方」を含むキャッチフレーズが 12 編で最も多く，表中では△で示した「会津」が 1 編あり，地名を含まないものは 8 編（うち 1 編は筆者の作品）を数えた。「喜多方」は，廃藩置県後の町村合併の際に「北方」から改称された地名と伝えられていて字面が良いため，今回のキャッチフレーズでも多用されたと想像できる。一方，地名を含まないキャッチフレーズは，画像や自治体名称が明記された観光ポスターなどにあしらわれると想像して考案された作品であろう。筆者もこの例に漏れない。事実，観光客の集客のためのポスターはこうした仕上がりのものが多い。

喜多方グルメを象徴するラーメンについては，「ラーメン」「拉麺」「麺」などの直接表現を含む作品が 11 編（うち 1 編は筆者の作品），これらを含まない作品が 7 編，「食べ」や「醤油」など喜多方ラーメンを相応に知っている者であれば想像可能な間接表現を含む作品が 2 編あった。

同様に飲食と関係する酒に関しては，「酒」「お酒」「日本酒」「酒場」という直接表現を含む作品が 7 編，これらを含まない作品が 12 編（うち 1 編は筆者の作品），「飲んで」という間接表現が明らかに清涼飲料水だとは考えられない作品が 1 編あった。

飲食（ラーメンと酒）に焦点を絞ると，現地訪問時間が日中であったことから，必然的にラーメン店で昼食を済ませた受講生が多かった様子を上記の数値から読み取れる。一方，酒についてみると，女子学生 5 名のうち酒を盛り込んだ作品は 1 名（20%）が提出しただけだった。男子学生は 14 名のうち 6 名（約 43%）が酒を盛り込んだキャッチフレーズを作成しており，飲酒文化における若干の性差が確認できた。

なお，表 3 の中で筆者が作成した俳句は，no.20 である。ここでは法師蝉というツクツクボウシを意味する季語を盛り込んだ。

Ⅴ．むすび―次年度以降に向けて―

以上のように本稿では，2019 年 8 月 23～25 日に福島県会津地方で現地実習を行った「地理学研究」と「地理学特論Ⅱ」について，その授業計画立案から事前学習会，さらに現地実習の実施記録や提出された課題の分析に至る一連の授業内容をまとめた。

小学校で 2020 年から，高等学校では 2022 年から始められる新しい学習指導要領では「主体的・対話的で深い学び」が背骨を成している。一見すると新機軸のように感じられるこの標語も，実のところ既に使い古された感もあるアクティブラーニングに酷似した概念である。つまり，「知識よりも考察」や「自ら問題意識を持って自主的に取り組む」という考動が新旧の学習指導要領に共通する概念となっている。

こうした考動には出来るだけ多くの知識があった方が考察を円滑に進められるのは自明であるが，こんにちの情報社会では「分からないことはスマートフォンで調べる」という行動様式が老若男女，洋の東西を問わず定着している。したがって，知識の有無による個人差は従前よりも遥かに小さくなっており，むしろネットワーク接続環境の有無が情報収集に差をもたらすのが現代社会の特徴である。今後の数年間で情報収集に関するネットワーク環境の地域差が急速に縮小していくのは必至である。そういう環境のもとで考動力の差をもたらすのは，必要な情報を取捨選択して集め，それを自身の知識や経験で補いながら実践に移して検証する力量，さらにはそれ

を他者へ分かり易く伝えられるプレゼンテーション能力といっても過言ではない。

地理学を基盤とした考究の中でこのような能力を育てるには，現地情報の収集を事前に図るためのデスクワーク，不足している情報を現地で調査すると同時に現地で実物を観察するフィールドワークの双方が必要である。高等学校で 2022 年から必履修化される「地理総合」では，とかく GIS がフォーカスされがちであるが，地図表現や地域分析のためのツールである GIS を目的化するのではなく,そこに至るまでのプロセスを大切にした教育と研究が強く求められるのではなかろうか。こうした観点から，本授業科目のような取組は，地理学を専門とする学生ばかりではない教員養成大学・学部において，極めて有効であると考えられる。

謝辞

本研究を進めるにあたり，会津若松市観光商工部観光課観光振興グループ主査の大竹一城氏，喜多方市教育委員会教育部文化課文化振興班副主任主査の片岡 洋氏，会津郡下郷町教育委員会事務局文化財係主任主査の木村沙織氏，同学校教育係の湯田久美子氏には資料提供等で大変お世話になりました。そして，対象地域の文献収集では福島大学人間発達文化学類教授の初澤敏生先生に多大なお力添えをいただきました。また，喜多方市の小原酒造の皆様には酒蔵などの醸造施設の見学で多くの便宜を図っていただきました。以上の方々のご厚意に対し記して御礼申し上げます。

引用・参考文献

香川貴志（2019a）重要伝統的建造物保存地区でのフィールドワーク―愛媛県西予市卯之町と内子町を対象とした京都教育大学における授業実践―,『新地理』, **67**(2), pp.20-30.

香川貴志（2019b）需要伝統的建造物群保存地区を学ぶための基礎文献と地形図読図課題―愛媛県西予市卯之町および喜多郡内子町の場合―.『京都教育大学環境教育研究年報』, **27**, pp.53-64.

香川貴志（2020）福島県内の重伝建地区および会津若松に関する基礎文献とその要旨.『京都教育大学環境教育研究年報』, **28**, pp.53-64.

喜多方市教育委員会（2016）『喜多方市小田付 重要伝統的検図物群保存対策調査報告書』喜多方市教育委員会.

財界ふくしま編集部（2006a）まるごと味わう「極上の会津」―根付いた新たな観光「仏都・会津」に「会津の味」の数々―. 『財界ふくしま』, **35**(7), pp.62-65.

財界ふくしま編集部（2006b）祭りでワッショイ「極上の会津」―「食」と「観光スポット」をミックスして誘客を図る―. 『財界ふくしま』, **35**(8), pp.116-119.

全国地方銀行協会調査部（2006）「極上の会津」を目指して―観光による地域活性化（会津若松市）―. 『地銀協月報』, **553**, pp.28-33.

高木 亨・仲井康通（2013）会津地方における 2011 年に発生した災害の影響と自治体の対応―会津坂下町・柳津町・三島町・金山町・昭和村・下郷町への聞き取り調査結果から―. 『日本地理学会発表要旨集』, **83**, p.291.

日本気象協会 Web サイト「過去の天気」, http://www.tenki.jp/past/ （2019 年 10 月 30 日閲覧）.

文化庁編（2015）『歴史と文化の町並み事典―重要伝統的建造物群保存地区 109―』, 中央公論美術出版.

文化庁 Web サイト「重要伝統的建造物群保存地区一覧（平成 30 年 8 月 17 日現在）」
http://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkazai/shokai/hozonchiku/judenken_ichiran.html
（2018 年 10 月 2 日閲覧）